

とあきらめていた母は、嬉し涙にくれた。

塘沽港より船に乗り、昭和二十年十月二十二日、大陸を離れた。十月二十七日、日本が見えてきたとき、デッキは鈴なりの人、人、人であふれ、喚声をあげて博多港に上陸。島根県の江津の大叔母のところで一週間世話になり、東京の叔父を頼って上京。狭い四畳半に親子七人が転がりこんだのである。

父は叔父の経営する工務店に役員として就職、母は昔取った杵柄きねづかの和裁の腕を活かし家族を支えてくれた。引揚げ後の苦労はあつても、どこまでも素直で孝心の信念厚い、畑野氏は一家団らんの融和のシンボルである。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

## 内蒙古・宣化で迎えた終戦

大阪府 末光 時枝

(旧姓 岡部)

昭和二十年十月二十八日の夜明け「オーイ、博多やぞー、博多が見えたぞー」と、父のどなる声が甲板への出入口から聞こえると、母や周りの人、船底の横に棚をこしらえた上に寝ていた人たちも起き上がり、ぞろぞろと梯子段を上りだした。

天津外港の塘沽港を十月二十六日に出航した「江ノ島丸」は、途中で嵐に遭い、ほとんどの人が栄養失調に加えて船酔いでぐったりしていた。母は避難途中に生まれて二カ月の弟をかかえて梯子段を上り、私もその後が続いた。甲板は既に人がいっぱい、朝もやに近づく山影を静かに見すえていた。

二年前、三十五歳の母と五歳の私が、蒙疆といわれていた内蒙古の宣化県城外東土関外（現在中国河北省

張家口市宣化区）へ送り出され、再び見る日本の島だつた。

五族協和を夢見た時代、現地除隊した父から、宣化の龍烟鉄鉱所へ職を求めたので、こちらへ来るようにとの手紙がきたとき、母はどんなにか嬉しかったのではないかと思う。私が生後八カ月のとき、父に召集令状がきて、母と私は佐賀の父方の家に預けられていたからだつた。

私は、若い叔父や叔母にもかわいがられたが、母は当時、当たり前前大家族の中で、嫁として姑や小姑たちには気がねをしながら、朝は早く起きて朝食をつくり、昼は授産所へ通つて軍服を縫い、夜は針仕事をしていた。

祖父は、母のことを不憫に思い温かく見守りながらも、優しい言葉をかけることはなかったが、こののほか、私をかわいがり、座敷でひとり食べる膳のそばに私を座らせ、母に給仕をさせていた。

母は私を連れて宣化へ行くことになり、大牟田の母方の祖父母、叔父、伯母たちに餞別をもらい、昭和十

八年秋、下関から関釜連絡船に乗り釜山港へ行き、そこから汽車で平壤・奉天（瀋陽）を経由、山海関・天津・北京を経る長い旅となつた。

見るものすべて珍しかった。物売りの支那人のかん高い歌うような声、車窓から見る原野を走る真っ黒な獣の群れ。前の座席にいた若い兵隊さんが「豚ですよ」と教えてくれた。「宣化は次の駅ですよ」と言われ、母が慌てて網棚からトランクを下ろし、私の手を引いて入口の方へ行きかけると、兵隊さんに止められた。宣化までそれから一時間もあり、日本とは何もかもスケールが違うことに驚いた。

宣化の駅に出迎えた父は髭面で、物心ついて初めて見る父の姿は恐ろしく思えた。

マーチョ（荷馬車）に乗つて、ガタガタと黄土色の土くれ道を、城外の社宅へ四キロほどゆられて行った。樹木がなく荒涼とした原野の中の一本道を行くと、荷車をひくロバの背にあてるムチの音と、蹄のかわいた音だけが聞こえた。

家に着くと、父が饅頭をひと包み出してくれた。日

本では食糧が不足し、和菓子などめつたに口にするこ  
とはなかつたので嬉しかった。母は、米も油も十分に  
あるという父の話を聞いて喜んでた。服装もモンペ  
を強制されることなく、何でも着られるというので  
晴々とした顔をしていた。

宣化の葡萄を買ってきてもらったときも驚いた。こ  
れまで見たこともない美しい緑色でつぶが大きく、父  
は「ナイフで皮をむくといい」と言った。母は「ナイ  
フで皮をむく葡萄があるなんて、さすが大陸ねえ」と  
感心していた。

住居はれんが造りの四軒長屋の端で、家族数によつ  
て「イ号」「ロ号」「ハ号」とあり、最初「イ号」社宅  
に住み、しばらくして「ロ号」に移った。ハ号は、三  
世代家族の人たちが住んでいた。

水は、中国人が井戸からくんで天秤棒でかついで運  
んでくれた。一メートルぐらいの高さの水瓶みながに入れて  
おくのだが、冬になると底まで凍りついた。母は、朝  
起きると、のみと金づちで氷を砕き、やかんに入れて  
ストーブにかけて、溶かして炊事をしなければならな

かった。

ひと冬に一、二度、ミシミシと音をたてて水瓶が割  
れることがあった。冬は零下二〇度まで下がるので、  
部屋は、一日中ストーブを焚いていたので乾燥して畳  
がボロボロになり、私はよく気管支を痛めた。

母がづらい思いをしたのは、生活条件の厳しさより、  
支那人とどう付き合えばよいのか戸惑うことや、父が  
外地生活で強いお酒を飲むようになり、気性が荒くな  
り性格が変わってしまったことらしかった。

会社で使っている支那人の青年が二、三人連れだつ  
て遊びにきて、買物を手伝ってくれたり、私の相手を  
して歌を教えてくれたりした。また、時々熱を出す私  
の頭を手拭で冷やしてくれたが、よくしぼらないので、  
いつも枕が濡れてしまうこともあった。私は支那人の  
子供たちともすぐ仲良くなり、三カ月もすると得意に  
なつて支那語を話し母を煙にまいた。

社宅の人たちが慰問団をつくっているのに加えても  
らい、駐屯地へ時々慰問に行つた。私は袖の長い着物  
を着せてもらい「九段の母」を踊った。「上野駅から

九段まで、勝手知らないじれったさ、杖をたよりに一日がかり、せがれきたぞや逢いにきた、空をつくよな大鳥居、こんな立派なお社に、神と祭られもつたいなさよ、母は泣けますうれしさに……、鷹が鷹の子生んだよ、今じゃ果報が身にあまる、金鷄勲章が見せたいばかり、逢いにきたぞえ九段坂」と小さい体で精いっぱい兵隊さんのためと踊った。

昭和二十年四月、宣化国民学校へ入学した私は、近所の社宅の子供と一時間ぐらいかかって城内の学校へ通った。春は花見に桃園へ出掛けた。冬が厳しかっただけに春になって桃の花、アカシアの花、野の花などが咲き出すと心が浮き立ち、「日本だったら花見は桜なのに……」などと愚痴っぽくいながら、日本を懐かしく語りあった。

七月になって母は城内の支那人の散髪屋へ顔剃りに行った。帰ってくる支那人の扱いがこれまでと違ってぞんざいになったことに腹を立てていた。戦局がはかばかしくなく、奥地の開拓団の人たちは、移動が始まっていることなど露知らず、民間人には三十キロほ

ど先の戦闘の様子などは分からなかった。

昭和二十年八月十五日、玉音放送があるというので、会社の講堂へ行ったが、雑音だけが聞こえ、「きつと、これまで以上に頑張れとの天皇のお言葉だろう」ということで家へ帰った。

母と私は、日が落ちるころ、裏につくった畑で種子蒔きをしていたが、父が帰ってきて、大声で「早く家の中へはいれ」と叫んだ。「もう少しで蒔き終わるから……」と言う母の返事をささげる父のただならぬ様子に、慌てて家に入ると父は表戸も裏戸も鍵をかけた。父は「戦争は負けたらしい。パーロ（八路軍）も中国軍も攻めてくる、暴動も起きるかもしれない」と言った。母は、そんなはずがないと信じたくない様子だったが、近所の人たちがやってきて、取りあえず城内へ荷物をまとめて移ることになった。

八路軍が表戸から押し入ってきたら、母と私は押し入れにかくれ、そこから納屋の方へ這って逃げていくことになった。幸い、暴民や八路軍が押し入ることはなかったが、私は原野の彼方から八路軍が馬を駆けて

こちらへやってくる夢にうなされた。

次の日の夜明けにトラックで城内へ避難。母と私は城内の社宅住まいの人の家へ入れてもらった。一軒の社宅に二家族が入った。臨月の母は、荷物を持つたり、トラックに揺られたので陣痛が起き、慌てて私の手を引き、避難する人たちや荷車が行きかい、黄塵が舞いあがって煙っている街並を通って宣化病院へ行った。病院には人が人や病人があふれて、玄関や廊下に寝かされていて、「ご覧の状態で、とてもお産までは診ることはできない」と受付で断られてしまった。

仕方なく避難先の社宅へ戻る途中、知人に出会い、その人が、あちこち尋ね回わって産婆さんを連れてきてくれた。父は元兵隊だったので憲兵隊に召集され、支那人捕虜解放で暴動を防ぐための警備に出掛けていていなかった。

母は八月十八日未明に弟を出産した。

二十日の昼近くに伝令が走ってきて、「一時に北京行きの引揚げ列車が出るので、駅へ行くように」と知らせて回っていた。

社宅に一緒にいた二家族は、大急ぎで持てるだけの荷物を持つと「先に駅へ行つて待っています」と言つて出て行つてしまった。ソ連軍や八路軍が間近にきているらしいと思われるが、産褥にある母は生まれたばかりの赤ん坊、七歳の私は足手まといで、どうすることもできなかったのでしょうか。

社宅から日本人が出て行くと、支那人が待ちかまえていて家財道具の略奪が始まった。私のいた家はドアが叩かれ、窓の外からのぞかれた。母は布団に寝ていたが、私は窓側に立つて、荷物を担いで駅へ向かう人たちが、空いた家から物を担ぎだし、口々に何か叫びながら行き交う支那人の姿を見ながら、恐ろしさと不安に震えたが動けなかった。人がいる所まで入つてくるとは思わなかったので、窓から離れてはいけなかつた。

日本人の姿が見えなくなつて、支那人の姿も少なくなつたころ、父が銃を抱えて走ってくるのが見えた。父は警備に出ている、昼食をもらうため警備本部に戻ると、そこには憲兵も兵隊もいないので、街の通りへ

出てみると、引揚げが始まっているのを知り、母も私も多分駅へ行つただろうと思つたが、気になつて戻つてみたとのことだつた。

龍烟鉄鉞所で一緒に仕事をしていた支那人に、日本へ帰つても大変だから、自分と一緒に仕事を続けないかと言われ、数家族の人がその人について行つた話をしていたが、父はやはり日本へ帰ることに決めていた。父は母のおなかに晒布をしつかり巻くように言ふと、あるだけの米を軍足につめると、新しい敷布一枚と一緒にリュックサックに入れた。敷布は、これから先の逃避行を考えると、生まれたばかりの弟は、とても生きることに難しいと思われ、埋葬する時の用意だつたとのこと。

大通りへ出ると、支那人の大人たじんの乗つたヤンチョ（人力車）を銃で脅して止め、赤ん坊を抱いた母とトランクを乗せ、後ろから銃をかまえて駅へ急ぎました。私は毛布を背に、父の横について走っていると、家へ出入りしていた支那人の青年が二人で寄つてきて、荷物を持ってくれ、私の手を引いてくれた。

駅へ着くと、出発時間を遥かに過ぎていたが汽車はきていなかった。二人の青年に父が、お陰で間に合つたから、何か気に入つた物を持っていくようにと、トランクをあけると何もいらなうと言つて、家で飼つていた犬を自分たちが引き取つて飼うと言つてくれた。私は、とてもかわいがつていた飼犬のことを、その時まで全く忘れていたことに驚き、二度と会うことがないと感じて悲しかったが、泣くこともできなかつた。硬い顔で黙つていた。

一時に出発するといつていた汽車は、夕方になつてやつと着いた。石炭を運ぶ無蓋貨車だつたが、大勢の人が乗るため、たくさん荷物が山のように置き去りにされた。

線路には障害物が置かれたり、爆破されていたので、修復しながら列車は進み、当時八時間ぐらいで行くことができた北京でも三日もかかつた。

汽車は数時間おきに、川辺や小さな駅に止まり、その間に列車を離れて遠くへ走つていつて排泄をすますと、石を積んでかまどを造り、鉄兜や鍋で煮炊きをし

た。炊き出しのおむすびが間に合わず、板切れにお椀でふせた御飯の差し入れもあった。

父は、飼っていた鶏を一羽しめて、腰にぶらさげていたので、それを持って、離れた支那人の家まで走って行き、餓頭ゴトウや食物と交換してきて食べさせてくれた。

私と母と弟が乗った車両は病院車として、アンペラ（アンペラ草で編んだ敷物）がかぶせてあり、暑い日差しを遮っていたが、夜になると雨が降り、雨脚が激しくなると、アンペラを繋いであつた糸が切れ、溜まった水が滝のように落ちてきた。敷いてあつた布団も水びたしになり、寝ることもできず寒さに震えた。

雨を吸った布団は、しばらく貨車の枠に掛けられていたが捨てられた。双子の男の赤ちゃんを連れた母親がいて、赤ちゃんが這い回ると、おむつから下痢便がもれて臭気が漂い、母親は「すみません、すみません」と言いながら新しい布を裂いて拭っていた。父親は残務整理のため残り、母子だけで引き揚げる家族のようだった。

おなかの大きな女の人が一人で乗っていたが、「ひ

もじいヨー、ひもじいヨー」と泣いているのを見て、父はその人に食べ物を分けてあげていた。列車の警備であちこちの車両を移って、列車が止まると私たちを見にきてくれた。

原野を列車が走っているとき、匪賊や黒軍（豪農が雇っている兵隊）が、現地の小さい馬に乗って銃を撃ちながら列車と平行して走ることがあった。列車の中では荷物を貨車の枠側において防備態勢をとり、警備の人が荷物やお金を投げ与えた。

日中は暑く、夜になって雨が降ると体が冷えた。

三日目に北京に着き、そこで武装解除をしたので、父が持っていた銃も他の人の銃と共にプラットホームに積まれた。ピストルは護身用に隠し持っていたが、後に龍煙鉄鉱所で同じ社宅にいた朝鮮の男の人が、娘を連れて天津から単独で朝鮮へ帰ることになるので、どうしてもピストルが欲しいと懇願するので渡してしまい、後でそのことで父は憲兵隊に咎められた。

北京駅で長い間列車は止まっていたが、受け入れ態勢ができていないということで、また二、三時間かか

つて天津へ移動した。

天津へ着くと、指示された避難所、芙蓉国民学校へ向かう途中、母は道路の端に倒れてしまった。赤ん坊を抱きとった父が、どうすることもできずにいるのを見かねた近くに住んでいた日本人の方が、私たち家族を家に連れて行って、母を看病して養生させてくださった。

そこには、女の子の姉妹がいて私より年上だったので、その人の服をもらって着た。その姉妹について、家の周りを少し出歩いたが、建物は洋風で階段手すりなど、しゃれた作りだったことを覚えている。

芙蓉国民学校へ移って間もなく、弟は熱がでて首に出来物ができた。皮膚がめくれ出し高熱になり、母も心配から具合が悪くなり二人一緒に天津病院に入院。医者から弟は「今夜がやまです」と言われたとき、せめて名前だけでも長生きするようにと願った父が「千歳」と命名した。私も病院に泊めてもらい、看護婦さんの当直ベツトに寝かせてもらった。ぐっすり眠りこんでオネショをしてしまい、一緒に仮眠していた看護

婦さんを驚かせて恥ずかしい思いもした。

病院の食事は良かったので、母は半分を私に食べさせてくれた。父は病院へ見舞うため外出許可証をもらって、行き帰りに芋やりんごを買って持ってきた。病院代や食べ物でお金はすぐに無くなった。校庭へ売りにくるりんごやふかし芋は一個百円もした。門の監視の目を盗んで支那人が天秤棒をかついで食物を売りにきた。アツという間に売り切れて、支那人は監視の人に叱られながら出ていった。壁の破れ目から「百円、百円」といって、マントー・芋・りんごなどが腕ごとつき出された。時々は品物をとってお金を渡さない人もいたようで支那人が抗議にきていた。なにせ、日本へ上陸したとき博多港で一世帯に渡されたお金が千円だったから、それは驚くほど高価だったが、みんな生きるためには高くてもそれは命をつなぐための宝物でもあった。

学校で配られる食料は、高粱を煮た物が多く、幼児には親がよくかんでそれを食べさせていた。便所はあふれて蛆がわき、発疹チフスや赤痢がはやり、大勢の



幼子や子供がバタバタと先に死んでいった。

朝起きると、昨日まで一緒に遊んだ子供が、死化粧をしてもらっているのを、死の意味もわからないまま当時、不思議に思つて眺めていた。夕方ごろから発熱し、明け方には命がはかなくなるのは栄養失調に加えて医療を施す術もなかったからであろう。

校庭に幌をかけたトラックが入つてくると、毛布に包まれた遺骸が積み込まれ、どこかへ運び去られた。

泣き叫ぶ母親たちと、それをなだめる大人たちの様子を、同級生の子と手をつないで見ている。

父がお腹に巻いていたお金もまたたく間に少なくなり、父は米軍が接収した木炭置場へ月の夜、木炭の入った俵を盗みにいった。銃を持ったアメリカ兵が、高く積み上げてある俵入りの木炭の上を巡回していたところで、影が遠のくのを見定め、つかえ棒を入れて崩れないようにして木炭俵を引き出すのは命懸けだった。あるとき、父は友人を連れていったらその人が腰を抜かしてしまい、友人と炭俵を交代に引きずって帰らねばならず大変だったようである。

弟は奇跡的に命を取りとめ、退院した日に天津神社にお参りに行ったが、社に御神体はなかった。街は表面は落ち着いているようだったが、ソ連兵が日本人から取り上げた腕時計を五、六個手首につけて、トラックで走り回り、時々支那人の暴動もあり、日本人がひどい目に遭つた。

支那人に食物を売つてもらうには子連れの方がかわいそうに思つてか、あまり高値をふっかけないので、父に連れられて歩いているとき、ワーツと人の騒ぐ声があつたので父が戸惑っていると、横を歩いていく支那人の男が手まねきして、近くの路地へ案内してくれた。迷路のような支那人の住居地を抜けて、違う道へ出るとお礼をする間もなく、サツと消えてしまった。日がたつにつれて、日本人に親切にするのははばかりな感じが感じられた。

そのころ、蒙疆政府の徳王の配下の支那人に付いて行つた父の同僚や家族が民衆裁判で殺されたというニュースが伝わり、両親は、宣化に残らなくて良かったと顔を白くして話をしていった。

十月末に引揚船が出ることになり、病人・赤ん坊・老人のいる家族が優先されることになった。広島には原爆が落ちて多くの人が死んだこと、東京・大阪・福岡などもほとんど焼土となっているという噂で、行く先は知らされないので、多分玉碎したといわれる沖繩へ連れて行かれるのではないかというのが、大方の人の意見だった。

両親は、赤ん坊や幼い私が、氷点下の寒さに耐えるだけの体力が無いのを心配し、戦火で焼かれたという沖繩でも暖かいだけでも生き延びられるのではと考えた。

引揚げのため校庭に荷物を持って並ばされたが、人員確認に手間取り、日が落ちても校庭に並んだままだなければならなかった。霜がしんしんおりてきて吐く息が白くなった。アメリカ軍のトラックに乗って駅へ運ばれたのは、夜も更けてからだった。

貴金屬類は、日本へ持ち帰り禁止となっていたので、父は最後まで持っていた金の指輪を指からはずすと、走る列車の窓から思いきり遠くへ投げた。

天津外港の塘沽港はだだっ広い所で、アメリカ兵、現地兵の検査があつて荷物はすべて土の上に広げて見せなければならなかった。石鹼の中に隠した宝石が見付けられたり、貴金屬が見付けられて、乗船取り消しになる人もいた。母は母乳が出にくくなっていたので、お湯をつくるために持っていた米の袋をさかさにさき、土の上にサラサラとこぼれ落ちた。それをまた拾い集める父の姿を、私はぼんやりとしか眺められなかった。栄養失調から目に出来物ができて視力が落ちていたのです。

船は魚雷をさけるため昼間航行し、夜は停泊した。

二日目の夜は嵐で船は大波をかぶつて揺れ、船底の中央にいた人たちは船酔いで大変だった。船底の壁の方は三段ほどの棚になり、人が大勢いたが、この場所の人たちの方が揺れ方はひどかった。人でぎっしり詰まっているので場所を変わることもできなかった。私は夜中に尿意をもよおしたので、父を起こして付き添ってもらい、出入口から甲板に出る所のロープにつかまって雨しぶきの中で排泄。船が右に左にローリングし、

飲料水を入れてあつた大きな杉樽が、甲板の端から端へころがり、大波が甲板を洗うのを見て足がすくんでいると、「早く立て！」と父にどなられた。

嵐の後、知り合いのおじいさんが亡くなり、家族もいなかったもので、私たち一家が水葬に立ち合つた。アメリカ人の牧師によつてミサが行われ、星条旗をかけた遺体の下の台が傾くと、毛布に包まれた遺体はすすると板の上を滑り、水しぶきをあげて海の底へ吸い込まれていった。

三日目、思いがけず博多港へ入港したことに両親は大喜び。父の郷里の佐賀にも母の故郷の大牟田にも近い所で、博多の街は父にはなじみの所だったので、見覚えのある山陰を目にしたときは、夢かと目をこすつた様子。

下船の支度が始まり、人が動きだしてもリュックサックにもたれたまま動かないおばあさんがいて、だれかが声をかけたら亡くなつていた。長い避難所での苦労の末、引揚船に乗つて安心して張りつめた気持ちがか切れてしまい、だれにも看とられることもない死だつ

た。

周りの人たちは、日本の土をせめてもう一度踏ませてあげたかつたと涙を流した。

博多港には朝鮮に帰るため、朝鮮の人たちが集まつてきていた。チマチヨゴリを着て踊る人たちに見られて、私はいつの間にか親とはぐれていたらしい。気づいた父に、バンと頭を叩かれ引き戻された。

博多駅まで歩いて駅前の広場へ行くと、露店でうどんを売っていたので、引揚援護局でもらつた千円の中からお金を払つてうどんを食べた。そこには浮浪児が大勢いて、空缶に針金の持ち手をつけたものを持って立っていて、人がわずかに残してくれるものを待っていた。父が下船するとき配られたカンパンを、年かきの少年に袋ごと渡すと、その少年は仲間の子どもたちに分け与えていた。

天津の塘沽港からの引揚げは、昭和二十二年まで続き、博多港は蒙疆居留民のほか、南朝鮮・上海・満州・大連などからも含め、百三十九万二、四二九人を受け入れている（引揚援護庁調べ）。その他、開船で引

き揚げた人たちも多かった。

第二次世界大戦が終結したとき、海外には七百万人の邦人がいたが、蒙疆地区にいた四万人の邦人は、満州のように残留孤児をだすような悲惨な状態にならなかったのは、敗戦後も、ソ連軍の進撃を阻止した戦いがあり、引揚げ列車の援護がされた。そのために亡くなられた多くの将兵があつたことは、十年ほど前に知ることができた。

十月二十八日、父の郷里で佐賀の祖父の家に着くと、祖母が泣きながら早速、風呂をたいてくれた。こすつてもこすつても垢が出てきて面白ほどだった。

日新国民学校へ転入したが、字を忘れてしまつて作文も書けず、支那語まじりの言葉は皆が面白がるので恥ずかしく緘黙になつて、よく泣いていた。先生がどうしたと聞いても黙っているの、先生も困つて、私は保健室へ連れて行かれ、正露丸を飲まされたりした。

祖父の家には、父の兄が満州から帰り、すぐ下の妹夫婦が四歳の子を連れて大連から帰り、その下の妹夫婦は撫順から、引揚げ途中に子供を亡くして帰り、弟

は南支の汕頭から帰つてきて、所帯がふくれ上つていた。

戦後の食料難と物資不足は、あまり広くもない家で軋轢あつなが起こつた。髪を坊主にして男装をして帰つた下の叔母は、亡くした子供のことを思つて泣いてばかりいた。

学校は少しも楽しくなく、大家族の人間関係は訳の分らない不安で、私にとつて日本は窮屈で狭くて息苦しかった。母の側へすりよつて、私は「宣化へ帰りたい」と何度も何度もせがんだ。

いつも返事をしない母に、しつこく「宣化へ帰ろう」とまたしても言つたとき、母は洗ひ物の手を止めると私の方を見もしないで、「私は二度と支那へは行きたくない」と呻くようにつぶやいた。

その顔があまりにも普段と違ふ顔だったので、ハツとして、子供心にも蒙疆でのことは母に話してはいけないことなのだと思ひ付き、その後、母を困らすようなことは言わなかつた。

父は職業を変え、その度に住居も変わり、母方の里

の大牟田へも行ったり、また佐賀へ戻ったりで、小学校を六回転校するはめになった。

中学・高校と大牟田の母方の里で過ごし、父は菓子製造をしていたが、三池争議が起きて商売もうまくいなくなつた。私が結婚して最初の子どもを生んでしばらくして、母は四十五歳で病没。生活がやつと安定しかかっていた時だったので、母は苦勞ばかりしていた姿しか思い出せないのが残念ではならない。

「蒙疆へ行けるようになったら行ってみたい」と、母の法事などでお酒がはいると、引揚げの苦勞話をしてくれた父も亡くなって久しい。

昭和六十三年、引揚者で当時宣化の奥の張家口市で教員をされていたS氏が、退職後、日本語の教師としてボランティアで張家口医学院へ行っておられる関係で私は、宣化を訪ねることができた。私の記憶があいまいな所もあり、当時宣化を準備されていた兵隊の方々に会って、そのころの話をして確認することがあったが、宣化の駅近くの南門の所で、「元気で日本へ帰ってね」と見送ってくれた女性は日本人ではなく、和服

を着ていたが朝鮮の女性たちで、その後、集団自決されたとのことでした。

黄塵の中を母と訪ねた宣化病院を、鐘楼の上から眺めていると、あの敗戦の脱出のざわめきや人々の叫び声までが記憶によみがえり、ざわざわと胸がさわぎ、涙で風景がかすんで見えた。

平成六年に引揚者有志で、蒙疆居留民の引揚げを守るため、ソ連軍と戦って亡くなられた将兵の方々の慰霊祭をすることになり、子供のころ、母が「私たちが乗った引揚船が、その後機雷に当たって沈んだ」と言ったことなど思い出し、引揚船「江ノ島丸」のその後のことも確かめたくなり、舞鶴引揚記念館を訪ねた。

資料を調べたり職員の方に尋ねたが、江ノ島丸は舞鶴港には入港していないため、消息は分からなかった。そこへ引揚船の模型が三十二隻展示されていたが、それを作られたモデルシップ友の会「ザ・コンパス」の方々が来られ、江ノ島丸のことを尋ねると、調べてみましょうと言つて二日後に連絡くださり、「江ノ島丸」は、昭和二十一年一月二十一日、上海より引揚者四千

二百人を乗せて鹿児島に向け出港。二十二日揚子江沖で機雷にふれて沈没、米国船に救助され、乗りうつることができたが死者が十三人あった由。つらい生活の後、やっと乗船でき、祖国への熱い思いを胸に抱かれただろうにと胸の痛むことでした。

ザ・コンパスの方々が、博多港に引揚記念碑を建てようと運動しているI氏を紹介してくださった。さまざまな方が戦争の悲惨な体験を風化させることなく、後の平和のために伝えようと努力されていることに感動。「引揚港・博多を考える会」の例会にも一度参加することができた。来春、念願の引揚記念のモニュメントができるとのこと。孫たちを連れて行き、恒久の平和のために祈りたい。

### 【執筆者の横顔】

時枝さんは昭和十三年四月、九州八幡市で生まれた。生後八カ月のとき、父親は召集令状をうけて軍隊に入営し、大陸勤務になったので、昭和十四年に時枝さんは八幡市から父の生家佐賀市の家に預けられて育った。

父は満州で現地除隊となり、蒙疆の宣化県の龍烟鉄鉱所に職を求めたので渡満するようにと父から手紙をうけた母はどんなに喜んだことか。

昭和十八年の秋、母と時枝さんは長い旅をして内蒙占宣化県の社宅に入った。時枝さんは、早速現地の子供と仲良く遊び、三カ月も後には得意になって中国語を話し母を驚かせた。昭和二十年四月、宣化の国民学校に入学し、通学していたその年の八月十五日玉音放送を聞いた。大人たちはただならぬ顔をしていた。父は帰宅して「八路軍が攻めてくる。暴動もあるかもしれない」と言い、取りあえず城内に移るようになった。父は憲兵隊に召集され、母は八月十八日に弟を出産した。大騒ぎのうちに八月二十日に北京行きの引揚げ列車が出るので宣化駅に出るようにとの知らせをうけ、近所の人たちはお先に行って待っているからと言って出発して行った。

母は産褥で生まれたばかりの赤ん坊、七歳の時枝さんが足手まといとなり、どうすることもできない。社宅から日本人が出て行ってしまうと、中国人が待ちか

まえていて家財道具の略奪を始めた。

父が帰ってきて母と赤ん坊と時枝さんの四人で駅に行くのに困っていたら、父のところにも来ていた二人の中国青年は荷物を背負って、時枝さんの手を引いてくれた。駅についた父は、この青年に物や金をあげようとしたが、受けとらずに別れた。

宣化駅から北京、天津に着いたものの弟が高熱を出し、母も体調が悪くなり二人とも天津病院に入院した。医師から弟は今夜危険だと宣告されたが、翌々日、弟は奇跡的に命を取り止めた。

天津外港の塘沽港から出発し、三日目に博多についたのは十月二十八日であった。父の故郷佐賀の祖父の家につくと、祖母は泣きながら風呂を焚いてくれた。時枝さんは日新国民学校に転入したが、父が職業を変わる度ごとに住居も変わり、時枝さんは六回も転校。母は身も心もぼろぼろになって四十五歳で病没、父も十二年前に亡くなった。

昭和六十三年、S教員が退職後、日本語の教師として中国の張家口市にいたので、その人を頼りに時枝さ

んは宣化県を訪ねて、幼年時の生活を回想して万感ごもごも涙を流された。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

## ホロンバイルの花のたね

長崎県 田中 長子

長崎より満州へ

昭和十九年五月、姉婿が興安北省索倫旗公署に勤務して、姉にとって初めてのお産なので、手伝いながら来て欲しいとの手紙を受け取った。常々あこがれていた満州の大地に行くことができると、期待と希望に胸膨らませて喜び勇んで、勤めていた佐世保市日字小学校を退職し、青葉薫る日本を後に、魚雷の浮遊すると噂のある下関海峡を船で朝鮮の釜山に渡り、釜山からハルビンまで汽車に乗り、二等車の客となった。広軌鉄道の二等車は乗り心地がよく、見る物聞く物